

させられる勉強は時に逃げたくなるし、分からなさを他者のせいにしたくなる。教師であれば、子ども自らが学習対象に積極的にかかわり、仲間とともに自分の見方や考え方を創っていく学びを追求したい。これには、子ども同士の対話や学び合い、また問いの追究や考えの創出などが必然的の伴い、授業時数は多くはなるが、学習内容の定着の度合いが高くなると言われるし、実際その傾向は強い。

近年、全国学力学習状況調査の実施により、求められる力の問い直しがされており、自校の子どもの苦手な部分や小学校期の最後までに身に付けさせたい力が明確になりつつある。それだけに焦点化とともに、身に付けさせなくてはいけないという教師の焦りも手伝う。その結果、子どもが学びたいと思うことより、教師が身に付けさせたいものとなり、どちらかと言えば受け身的な授業が多くなってないか危惧する。授業の冒頭の「めあて」の板書も、授業の方向性を明示化するには有効であるが、そのめあての出处が気になる。子どもが介在しないところでできた（正確には、教師が作成した）めあては、身に付けさせたい方向性であり、子どもが学びたいと思っているとは限らない。理想は、授業の中で教師が教えたい内容が、子どもが学びたい内容に変換されることである。

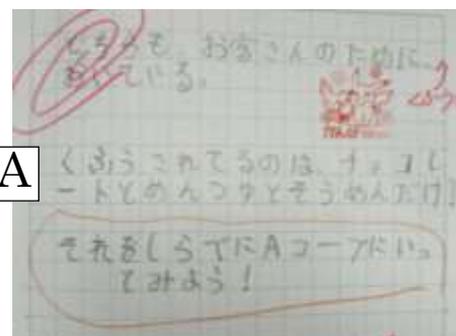
そこで、少しでも、子ども主体の自覚的な学びを取り戻すために、自分の学びに対する Tweet（つぶやき）を記入させたい。スーパーマーケットを調べてチョコレート売り場とそうめん売り場に、それぞれ子どもが見つけやすい高さに陳列したり、そうめんと麺つゆをセットで置いたりしていることを知った子どもは、**A**「工夫はチョコレートと麺つゆとそうめんだけ？」と書いている。この Tweet を重視してはどうであろうか。学習を他人事ではなく、自分事にする自覚化に、Tweet されたノートに期待したい。算数科においても、教科書やドリルにも、問題のそばに解決に至る自分自身の Tweet や友だちに関する Tweet をしていってはどうか。

そう言えば、これまでも本を読みながら、メモだけではなく、線を引いたり○を書いたりしていたが、これも Tweet（つぶやき）である。これが教科書であれば Tweet 教科書であり、算数ドリルでも苦戦をした問題に攻略方法を書いたりすれば Tweet ドリルと言うことになる。

Tweet ノートであれ、実践してみてどうかという検証段階が必要であろう。あくまでも、子どもにとっての学びを子ども自身が自分のものにする手法として、ノートやドリル等に Tweet させてみたいものである。（芝）



考えを確かにする「学び合う学び」



A